

開場当たりの外交政策

八〇年代を目前にした今日の激しい国際環境のなかで、日本外交は、いよいよみずから航海の海図をもたねばならなくなってきた。そうであるだけに、開かれた国際感覚と外交上



意味で日本外交の場当りの体質を明らかにせよと見せつけた出来事であった。

それは、この問題をめぐる日本政府内部の不統一によってわが国政府の体質的弱点を外部にさらしたという点のみにあるのではない。また、今日の日

中関係が、中越戦争や中国側のプラント輸入中断などで微妙な問題をほらみつつあるときに、あえて中国側を刺激するような措置をとる必然性が緊急にあったのか、という点のみにあるのではない。むしろ、領土問題と

いうような伝統的対外交イシューに対応する場合の外交感覚が、依然として、またきわめて伝統的なものでしかないところにある。

の明白なシナリオを欠くならば、わが国外交の将来にたいしても不安がつるだけであろうが、去る五月中旬に生じた尖閣列島の「実効支配」への試み(基礎調査用仮ヘリポート建設(警手))とその醜態とは、ある

すぎているのではないか。このため大方としても見解を表明せざるを得なくなった」との鄧小平副首相の発言の方が、はるかに大人の感覚であった。

二つの「実効支配」

尖閣列島 北方領土

東京外語大学教授 中嶋嶺雄

「尖閣列島を確保する工作には高まり、もちたさなるときには低くなる。この運動は波状的であり、長く久しく継続しなればなりません」(一九七四年十月二日、國慶節に参加した華僑、海外在住台湾同胞および外國籍中国人との会見での講話)も感ぜられる。

もとより、私は、この問題で中国側の立場を支持しようとは、われわれは永遠にこの中国

いうものではない。むしろ、鄧小平自身、この問題では次のように実によく問題の本質をよくとらえて発言していることをしばしば指摘して警告を發してきたつもりである。鄧小平氏は

「この点では、日本側は勝者」

われた行為と新聞報道の大きさからみて、中国側も発言せざるを得ない」という言葉を考へるころか、あえて現時点で尖閣列島の「実効支配」を改めて試みるという外交上の無用意かつ無意味な行為に出た日本政府の当面の責任者こそ園田外相なのである。



園ソ連当局の思うツボに それにしても、今回の出来事を大いに喜んだのはソ連当局ではなからうか。なぜなら、日本が尖閣列島の「実効支配」を強調すればするほど、すでにエトロフ、クナシリ両島に軍事基地を建設して「実効支配」を試みているソ連側は、同じ論理によって自己の正当性をわが国にたいし主張し得るからである

この点でも、今回の試みは、わが国の利益を大きく損う悪行であったといえよう。

先づ鄧小平副首相による「日本側は騒ぎすぎているのではな

領土を放棄することはできず、日本も放棄できず、ここに問題があるので。尖閣列島確保の運動は継続しなければなりません。運動の形態には高低があり、得てよいのです。以前のときに日本が占領しようとしたときに